

～毎月10日は人権を考える日～

## 映画「破戒」から考える

昨年、水平社創立100周年記念事業として映画『破戒』が制作されました。

主人公は瀬川丑松<sup>せがわうしまつ</sup>。丑松は、故郷を出るとき父親から「いいか丑松、部落民という素性を隠せ。」と言われます。この戒めを守って、素性を隠したまま、やがて丑松は小学校の教師となり、子どもたちに慕われます。自分が授業をする教室で、子どもによる部落差別事象が起こります。丑松は、子どもたちに差別することの間違いを話します。そして、誰もが胸を張って生きていくことの素晴らしさを話して聞かせるのです。ですから、子どもたちにとって丑松は、すべての子に対して同じ態度で接する大好きな先生なのです。

また、この戒めを守って、大人の部落差別事象の現場に出くわした時には、じっと耐えて見て見ぬふりをするのです。「止めたい。止めさせたい。」という気持ちをどのようにして押しとどめてい

たのでしょうか。どんな気持ちで我慢して耐えていたのでしょうか。丑松の尊敬する猪子蓮太郎<sup>いのこれんたろう</sup>は、出自を明らかにして活動する思想家です。その猪子に、手紙を出し面会することができました。しかし、猪子蓮太郎は壮絶な死を遂げます。その後、丑松の素性が、様々な形で、悪意ある人によって容赦なく暴かれていくのです。

思い悩む丑松は、ついに決意します。父の戒めを破ることを。学校で子どもたちに自分の出自を話します。そして涙ながらに懺悔します。・・・懺悔しなければならないことでしょうか。部落差別は、絶対に許すことができないものです。明治時代は、そういう時代だったのでしょう。今の時代には考えられないことです。20数年後には、水平社が創立され、宣言が高々と読み上げられます。「自らを誇りうる時が来たのだ。」

教師を辞し東京へ向かう丑松を、子どもたちと師範学校時代からの友達の教師が見送ります。丑松は子どもたちに言うのです。「生きていれば、きっとまた会える。」この言葉から、丑松の子どもたちへのメッセージが想像できます。「どんなに苦しくても、耐えろ。そして生きろ。」「この世の中をきっと変えてみせるぞ。それまで、がんばれ。」「みんなで一緒に、差別のない世の中にしていくぞ。」「仲間を信じろ。仲間と一緒に耐えられるぞ。仲間と一緒に変えられるぞ。」もっともっとたくさんの思いを込めて語ったのだと思います。

「愚かだから差別するのではない。弱いから差別するのだ。」劇中の言葉で、印象に残った言葉です。私なりに解釈すると、差別することは許されないことだと分かっている。それが分からないほど人間は愚かではない。差別するのは、自分を守ろうとして、自分以外の者を犠牲にしているのだ。

自分以外の者を犠牲にして自分を守ろうとする<sup>ずる</sup>狡さなのだ。差別することは、自分の弱さをさらけ出していることなのだ。

この弱さを克服していくことが、現在に生きる私たちの使命だと考えます。一人一人の弱さを克服して、住みよいまち西条をつくり上げていきましょう。